

ことば デザイン 文字と文様 & 令和6年度発掘成果展

みどころ

福井県教育庁埋蔵文化財調査センターは、文化財保護法にもとづく埋蔵文化財保護行政の一環として、県内各地で発掘調査をおこない、調査成果を『福井県埋蔵文化財調査報告』として刊行しています。その成果には、ふるさと福井の歴史を語る出土品が数多く含まれています。

今回は、過去数千年にわたる歴史のなかで刻まれた文様(ことば)や文字(デザイン)の様相や移り変わりに焦点を当て、企画展を開催します。

またもう一つのコーナーでは、令和6年度に発掘調査を行った沖布目北(おきぬのめきた)遺跡について、出土遺物や発掘調査時の写真パネルを使って発掘調査の成果をご紹介します。

これから、展示のみどころをご紹介します。

① 古墳時代の直弧文

弥生時代から古墳時代にかけて、物に刻まれた文様は、そこに込められた意味とともに徐々に変化しながら受け継がれていきます。

弥生時代後期には、弧帯文と呼ばれる弧と直線で表現された文様が吉備地方から生まれました。福井県では、糞置遺跡(福井市)から弧帯文が描かれた弧文板が出土しています。のちに、この弧帯文から派生して鍵手文と呼ばれる、直角に交差する線で構成される文様が生まれます。さらに弥生時代から古墳時代に移行する時期には、原単位図形と呼ばれる図形を組み合わせで作られた原単位文が出現し、近畿地方を中心に東海・北陸地方まで広がりました。このような流れを経て、直弧文というデザイン性に富んだ文様が誕生します。

直弧文は、斜め十字に組み合わされた帯の交差した部分を中心にめぐる帯を基に、巻き込まれる他の帯から構成される、立体的で複雑な構図を持っています。紫金山古墳(大



1. 弧文板 福井市糞置遺跡出土

阪府茨木市)から出土した、スイジガイの形をモチーフにデザインされた貝輪が直弧文の起源とされ、後のさまざまな直弧文のお手本となったと言われています。

直弧文が施される対象物の中でも主要なものには、装飾古墳や鹿角製刀剣装具、形象埴輪があります。鹿角製刀剣装具については、その伝播とともに直弧文の形と思想が各地に伝えられた可能性が指摘されています。福井県内では二本松山古墳(永平寺町)から鹿角製刀剣装具が出土しており、立体的な浮彫で直弧文が表現されているのが特徴です。

古代の日本においては、魂を結び鎮める方法の一つとして、結び留めた紐の呪力が信じられていました。直弧文は単なる装飾ではなく、魂を結び鎮める意味を込めて紐帯の結び留めの形をもとにデザインされたものなのかもしれません。



2. 鹿角製装具(部分)

永平寺町二本松山古墳出土

(東京国立博物館所蔵 Image : TNM Image Archives)



3. 鹿角製装具残欠(束頭)(部分)

永平寺町二本松山古墳出土

(東京国立博物館所蔵 Image : TNM Image Archives)

② 古代の瓦塔と文字

宝亀元年(770)、称徳天皇によって百万塔(百万基の木造三重小塔)が完成し、諸大寺に安置されました。以降9世紀代にかけて、木造塔を意識し、ディテールを模倣して造られた瓦製の塔「瓦塔」が各地で多く製作されるようになります。福井県では、柿原熊ノ子窯跡(あわら市)で瓦塔もしくは木製小塔に乘せるために造られた須恵質の相輪の部品がほぼ一揃い見つかりました。相輪はひび割れや欠損などがみられることから失敗品とみられ、製作時期は、窯の操業年代より8世紀後半から9世紀前半におさまると考えられます。こうした須恵質相輪の出土例は県内では初めてのことであり、古代の坂井郡の範囲で相輪が出土した初めての事例です。



4. 須恵質相輪 あわら市柿原熊ノ子窯跡出土

柿原熊ノ子窯跡出土相輪のデザインに注目してみましょう。

水煙(すいえん)の炎部は一般的に、4枚の板状の羽がつけられます。一方、柿原熊ノ子窯跡出土相輪の水煙は、粘土ひもで透かしと4つの炎部をつくり、立体的に表現しています。炎部の形状から、菖蒲沢窯跡(長野県塩尻市)や薬師寺東塔(奈良県奈良市)のような水煙を目指して製作された可能性が指摘できます。

請花(うけばな)には、これも立体的な花卉が取り付けられていますが、請花に花卉を伴う例は全国的にも少なく、瓦塔では札馬窯跡(兵庫県加古川市)出土例などが類例として挙げられます。また花卉の立体的な形状もあまり類例がなく、非常に個性的です。

擦管には、斜線のヘラ記号が刻まれています。通し番号とみられ、上から順(降順)に振られていたと考えられます。當麻寺西塔(奈良県葛城市)の宝輪にも同様の例がみられますが、こちらは下から順番(昇順)に漢字が刻まれるという違いがあります。

模倣とオリジナリティを掛け合わせて生み出された須恵質相輪を、ぜひ間近でご覧ください。



5. 相輪復元図



6. 稜椀 あわら市柿原熊ノ子窯跡

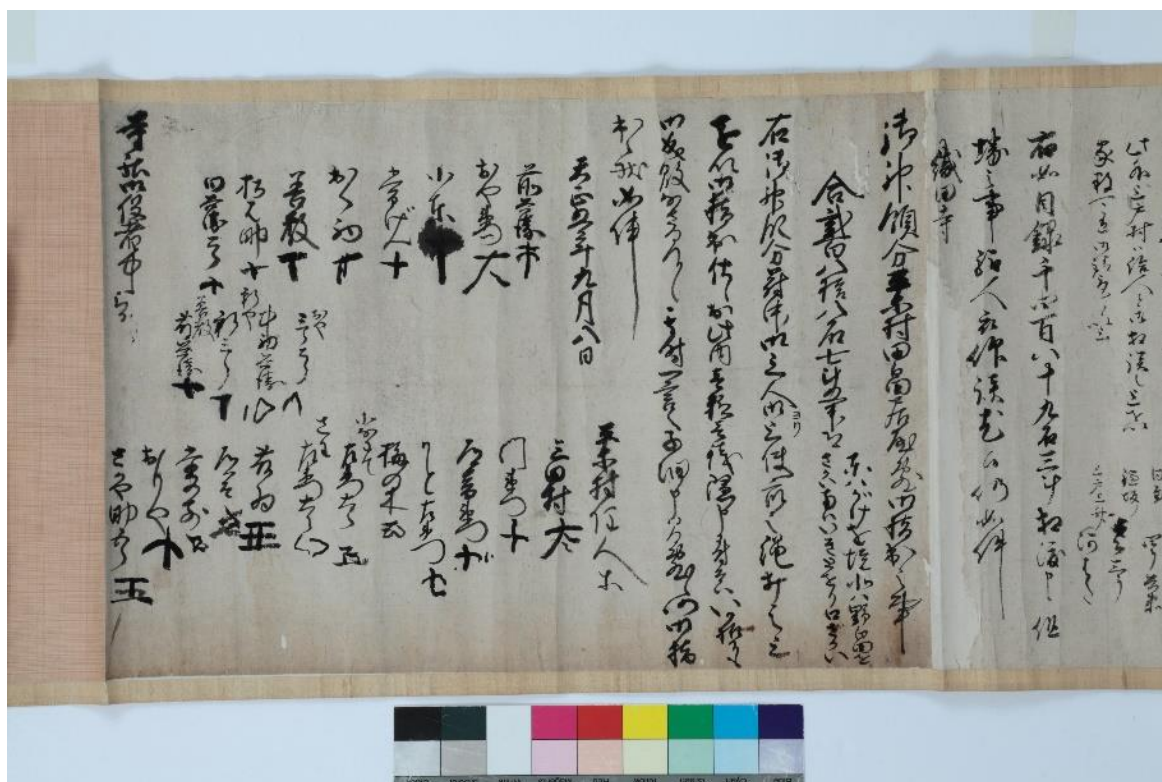
柿原熊ノ子窯跡では須恵質相輪のほかにも多種多様な須恵器(窯で焼かれた灰色の固い土器)が大量に出土しました。中には、金属製の仏器を模倣したものも見つかっています。その内の一つである稜椀には、金属器を強く意識して作ったものがある一方で、金属器の特徴を一部失ったものもみられます。同様の稜椀は、柿原熊ノ子窯跡を含む金津西窯跡群よりおよそ2km北東に位置する細呂木阪東山遺跡(あわら市)で「津家」と墨書された資料が出土しています。

細呂木阪東山遺跡では、ほかにも多量の墨書須恵器が出土しており、「津家」という墨書は何らかの湾港施設の存在がうかがわれます。細呂木阪東山遺跡は金津西窯跡群で焼かれた須恵器の集積地であると考えられ、そこから北潟湖を通じて日本海へ運んでいた可能性が指摘できます。古代の人々が遺した文字資料は、遺跡の性格をうかがい知ることができる貴重な資料です。今回は、細呂木阪東山遺跡の墨書須恵器の一部を展示いたします。

④ 中世越前焼の押印・刻文・刻印・刻画文

越前焼には押印文・刻文・刻印・刻画文を認めるものが一定量みられます。

押印文と呼ぶスタンプは、主に 17 世紀中頃まで越前焼の大甕にみられます。基本的に陶工 1 人が 1 つ有する羽子板状の木製品で施され、開窯時は粘土紐を積み上げて成形する甕の繋ぎ目の補強の役割を果たしましたが、鎌倉時代後期頃には肩部のみに認めるなど、装飾性を帯びていきます。鎌倉時代頃までは主に格子目文で構成されましたが、南北朝時代に「上」・「大」・「本」の文字と格子目文からなる越前窯独自のものが現れます。この時期は窯跡群の再編など、生産地遺跡の様相に変化を認める時期で、列島規模でも小規模な生産地が駆逐され、珠洲窯が徐々に甕の生産量を減らし、鉢の増産に移行する時期とも一致します。越前窯独自の押印文



7. 平等村差出状(文書: 劔神社所蔵／画像: 福井県立歴史博物館所蔵)

が出現することは、そうした状況下での甕のブランド性の確立を表すもので、押印文は商標ともいえる役割を担った可能性があり、この時期を境に越前窯は甕の量産に移行していきます。

押印文以外にも多くの器種に、ヘラの先端で施す多種多様な刻文がみられます。それらは形などで主に漢字・仮名・数字からなる刻字文、直線的な線からなる刻線文、刻線が交わる直角文、丸状の記号を含む円弧文、三角形の記号を含む三角文、傘型を呈する傘型文の記号文に分類可能です。これらのうち傘型文は大量生産と広域流通を実現した室町時代後期頃に多くみられるものです。これは柴田勝家が平等村の所領を安堵した天正5年(1577)9月付の「御神領分平等村田畠居屋敷御指出之事」に認める長百姓「おもや」の略押と一致するもので、彼らが当時の越前焼生産に深く関与したことが分かります。このほか特に鎌倉時代後期頃の壺や鉢類には菱形や菊花の文様を刻印して装飾性を高めたものが一定量みられます。

このほか希少なものに器面に絵を描いた甕や壺があります。このように絵を描くものは猿投焼や渥美焼、丹波焼や珠洲焼にもみられますが、それらの窯の絵は範囲が広いのに対し、越前焼は狭いことが特徴として挙げられます。越前焼の刻画文として著名なものに、西山窯跡群出土遺物があります。そのなかでも壺に描かれた鳥と蝶は繊細で優美なタッチで、水上窯跡群出土遺物などほかの窯跡のものが絵を描くことが不慣れな陶工によると思われるのに対して、陶画工の関与を考えられ、興味深いものです。越前焼のみならず、中世陶器の刻画文のモチーフは、秋草文・草花文・樹木文や鳥や蝶からなるものが多いですが、これらは「樹木崇拜」や貴族階層の有する美意識を反映したものと理解されており、当時の鏡などの文様に多くみられます。



8. 越前焼の壺と刻画文(右:拓本) 越前町西山窯跡群

令和6年度 発掘成果展～沖布目北(おきぬのめきた)遺跡～

令和6年6月から10月にかけて、坂井市に所在する沖布目北(おきぬのめきた)遺跡の発掘調査を行いました。

沖布目北遺跡は、福井平野のほぼ中央に位置し、竹田川の支川である兵庫川沿いに立地しています。令和3・4年度に主要地方道丸岡川西線福井港丸岡インター連絡道路改良工事に伴う発掘調査がおこなわれ、建物跡や埋設(まいせつ)土器、土器だまりなど縄文時代後期の集落に関わる遺構が数多く検出されています。

今回の調査は一般県道福井森田丸岡線道路改良工事に伴うもので、調査地は住宅地から離れた水田地帯の中、沖布目北遺跡の範囲の中でも東端部にあたります。調査の結果、縄文時代後期と弥生時代中期の遺構や遺物が見つかりました。また調査地の真ん中を走る当時の自然流路より南側は低地でありかつ遺構や遺物が非常に少ないことから、今回の調査範囲は縄文時代集落の南側縁辺部にあたると推定しています。

縄文時代後期の遺構としては、竪穴建物 2 棟や多数の柱穴、旧河川の肩部に広がる土器だまり(土器が集中的に廃棄された場所)などが見つかりました。

竪穴建物は、沖布目北遺跡では初めての発見です。その内部には、石囲い炉や屋根を支える柱穴を確認し、2棟の竪穴建物のうち片方の石囲い炉の内部からはほぼ完形の土器が出土しました。この土器には、炭化物や被熱痕がみられないことから、炉体(土器を炉として使用すること)ではなく、炉として使用されなくなったのちに据えられたものと考えられます。そこには儀礼的な意図が込められていたのでしょうか。

土器だまりは、竪穴建物の近くを走る旧河川の肩部に不要になった土器などの生活用具を継続的に捨ててできたものと考えられます。磨消縄文と呼ばれる技法で文様を描いた縄文土

器などが大量に捨てられていました。土器だまりからは、土器のみならず石錘などの石器や土製耳飾りも見つかっています。

土製耳飾りの中には漆や赤色顔料が塗られているものも複数点みられます。漆や顔料を耳飾りに塗ることは少なくありませんが、通常土の中に埋もれている間に漆や顔料が消えてしまうことが多いため、今回出土した耳飾りは非常に貴重な資料です。



9. 石囲炉 沖布目北遺跡



10. 調査区遠景 沖布目北遺跡



11. 調査区全景 沖布目北遺跡



12. 縄文時代後期前葉の土器 沖布目北遺跡



14. 打製石包丁 沖布目北遺跡



13. 土製耳飾り 沖布目北遺跡

当該期にはほかにも、赤色顔料を加工した際に顔料が付着した磨石、土器製作をしていた証拠となる粘土塊など、当時の人々の活動の様子が垣間見える興味深い遺物が出土しています。

弥生時代中期の可能性のある溝も見つかっています。溝の中からは廃棄された打製石包丁などが出土し、弥生時代中期の集落が安定的に営まれていたことが明らかとなりました。打製石包丁には、イネなどの栽培植物を刈り取った際の使用痕とされるコーン・グロス(穀物光沢)と思われる光沢がみられます。また、溝をつけて

分割する施溝分割という手法が用いられたと考えられる石核も見つかっています。弥生時代中期の玉作りの工程を示す資料です。

また溝のすぐそばには、土器埋設遺構(どきまいせつこう)も確認しました。他の遺跡の事例では埋設土器の中から人骨が見つかることがあり、子供の棺だと考えられています。

今回の発掘調査によって、縄文時代後期の集落跡として初めて竪穴建物を確認したほか、土器などの生活で使用した用具を継続的に建物近くの河川に廃棄し続けていたことが明らかになるなど、本遺跡を理解する上で重要な多くの成果を得ることができました。